

# 朝永三十郎の国際関係認識

——近代日本における〈自我・国家・国際関係〉の原的形成——

芝崎 厚士

## はじめに

本稿は、明治後期から昭和前半まで活躍した西洋哲学史研究者、朝永三十郎(一八七一—一九五二)の生涯に亘る活動の検討を通して、朝永の歴史的な意味を明らかにすることを目的とする。

朝永三十郎の研究には、大きく分けて二つの意義がある。第一が、国際関係論は言うまでもなく、そもそも近代日本思想史・哲学史においてさえ十分に検討、評価されてこなかった朝永を再評価する、という意義である。

第二が、国際文化論・国際関係思想史的な意義である。特に、『永遠平和のために』に代表されるイマニュエル・カントの平和に関する言説の解釈の系譜における朝永の位置、およびそれに即して生み出される「国際関係とは何か」という問いと答えが依拠する認識論的機制、すなわち「この世界とは何か」を考える際に、世界を構成

する位相の一つとして他の位相との関係において国際関係をとらえるのとらえ方、としての「国際関係認識」の、近代日本における形成に果たした朝永の役割の検討である。

この点に関する考察は、いわゆる国際関係思想史であるばかりでなく、「国際関係」という世界の構成のし方を、人々が「生きるための工夫」ないし「死活問題」という意味での「文化」としてどのように考え、理解しようとしたかを研究対象とする、「文化としての国際関係(認識)」を扱う、国際文化論の一分野に属する研究である。<sup>(2)</sup>

筆者の専門分野は、第一義的には国際文化論・国際関係思想史であり、この第二の課題を追求するにあたり、新カント派の影響を受けつつ、世界観としての哲学史研究の立場から近代日本の自己形成にコミットした朝永を、考察の対象として選択した。しかし、朝永研究自体がほとんど存在しなかったが故に、近代日本思想史・哲学史における朝永像を実証的に解明することが、まず必要であった。

本稿は、基本的に時系列に沿ってこの第一の課題を検討しつつ、その上で第二の課題へと議論を接続していく、という構成を取っている。

本稿では、まず「一」において、朝永と彼の仕事に関する通説的理解を確認し、朝永を扱う際に軽視されてきた、明治末から欧米留学直後に至る学問形成期の朝永の思想と行動を検討し、その結果明らかとなった、朝永の実像を提示する。

つづいて「二」において、大正期の彼の活動、とりわけ、留学以後の彼の中心的な仕事の一つである『カントの平和論』に注目し、同書と、もう一つの名著である『近世に於ける「我」の自覚史』を関連づけつつ、その内容、及びその朝永の思想における意味、そして日本におけるカントの平和に関する議論の読解の系譜上の意味、を明らかにする。

さらに「三」において、『カントの平和論』以後の朝永、そして彼以降の世代と彼の仕事との関係を、カント平和論読解の系譜を中心にしつつ総括する。ここにおいて、彼の歴史の意味について、近代日本の哲学的形成者、哲学理解の文脈設定者、「近代国際関係認識」の原的形成者としての朝永、という仮説を提示する。

## 一 朝永三十郎

### (1) 基本的視座

通説的な理解では、朝永三十郎は大正期に活躍した京都帝国大学教授で、ヴィンデルバントに師事した新カント派の哲学史家で

ある。<sup>(3)</sup> 同僚であった西田幾多郎とは異なり、西洋哲学史の祖述が主な仕事であり、同時代、及びある程度までの時期の後世において、概説者、紹介者としては少なからぬ影響を及ぼしたにせよ、その思想や言論のオリジナリティが評価を受けることは全くといってよいほどなかった存在である。

こうした、研究上の意義が高いとは言えない著者としての朝永のイメージは、主著とされる『近世に於ける「我」の自覚史』（初版一九一六年、以下『我』の自覚史）と『カントの平和論』（初版一九二二年）に対しても同様に適用されることが多い。前者は、日本初の本格的な西洋哲学史の決定版とも言える基礎文献であり、後者は、日本初のカントの平和に関する哲学的立場の体系的な解釈を示した文献である。両書は当時、日本の一握りのエリートたちの間にすぎないとはいえず、同時代的に広く読まれ、彼らの哲学史理解やカント理解に多大な影響をもたらした文献として知られてもいる。しかし、それらが『善の研究』や『三酔人経綸問答』のような意味で評価されることはなかったし、そこから概説書として以上の歴史的な意味を引き出そうとする試みすら、ほとんど存在してこなかったのである。

本稿は、単に研究史上の空白となってきた朝永を丹念に調べることのみによって、その学問的な意義を主張するものではない。むしろ、朝永が発見したことは、あまりに重要であると同時に、後世からみて、また同時代の多くの人々からみてもあまりに自明であるように見えるものであるが故に、今まで検討の俎上に載ってこなかっ

たのではないかと考えている。そしてその発見は、世界全体のあり方を、現在、そして今後どのように捉えるか、すなわち「この世界とは何か」を考えるという、近代以降の世界のあり方の根幹を規定する思考そのものにかかわっているのである。この点を理解するには、まず、通説化し陳腐化した朝永像を打ち毀し、彼の思想と行動の実像を詳らかにしなければならない。

朝永三十郎は一八七一（明治四年）に現在の長崎県で、旧大村藩士の三男として生まれ、一九五一（昭和二六年）九月一日に八〇歳で死去した。<sup>(4)</sup>八二年から漢学塾へ通い、八七年に大村中学校第二学年を修了後、東京の共立中学校へ入学した。八九年に第一高等学校に入学し、当時一高教官であった内村鑑三の感化もあり、哲学を志すようになった。この年父親が死去するが、すでに母親を一二歳の時に失っていたため、三十郎兄弟は、就職した者が順次、弟たちの学資を出し合うなどして助け合っていた。このころ読んだカーライルの『英雄伝』が三十郎青年に大きな影響を与えたといわれる。

一八九五年に東京帝国大学文科大学に入学、哲学・哲学史を専攻し、ケイベル、井上哲次郎、元良勇次郎、中島力造らの教えを受けた。九八年七月に卒業後、同年九月に二七歳で京都の真宗大学教授となる。当時は哲学や哲学史だけでなく、倫理学や心理学も教えていた。一九〇一年に真宗大学は東京に移転、朝永も東京に移った。

〇二年に当時女流歌人美福秀子と結婚、長男振一郎をはじめとする二男二女に恵まれた。

一九〇二年に、日本で最初の体系的な哲学教科書の一つである『哲学綱要』を刊行、〇五年には日本で最初の本格的な哲学用語辞典である『哲学辞典』を出版している。<sup>(5)</sup>双方とも純粋なオリジナル著作ではなく、ドイツ語の教科書や辞典を下敷きにした朝永なりの要約であった。双方とも好評で、特に『哲学辞典』は後に続く学生や研究者に広く利用された。<sup>(6)</sup>

## (2) 留学以前

留学以前（一八九八―一九〇九）の朝永は、学者であると同時に文明批評家であった。象牙の塔にこもり純学術的な研究のみに専心する朝永、というのはむしろ晩年の二〇年ほどの時期の姿であって、この一〇年ほどの間は、一方で哲学史の基礎研究を進めつつ、<sup>(7)</sup>もう一方で日本の現状を見据え、哲学史の知識をもとに、日本及び日本人がどうあるべきかを、丁西倫理会での講演と講演集である『丁西倫理会倫理講演集』を主な足場として、論じ続けたのである。<sup>(8)</sup><sup>(9)</sup>

こうした議論が顕著となるのは日露戦争以後であり、当初はギリシャ哲学、ツルゲーネフ由来の「ドン・キホーテとハムレット」論などを用いて、戦後の日本がどのような哲学的立場を持つべきかを考察していた。と同時に、他国の哲学をはじめとする「人文」のどのような部分を取り入れるか、また拒むのか、といった国際比較哲学的な文明論も数多く残している。<sup>(10)</sup>

たとえば、この時期書かれた短文「凱旋門は一時足る可し」<sup>(11)</sup>では、日露戦捷を祝う凱旋門を馬場先門跡に建設しようとすることに反対し、次のような議論を行っている。第一に、そもそも凱旋門を作る

こと自体を批判し、第二に、もし作るとしても一時的なものにするべきであり、永久的に作り残すべきではない、と主張するのである。

第一の点に関して朝永は、そもそも、凱旋門のような記念物は、野蠻人が敵の首級を髑髏にして持ち歩くことに等しい「野蠻の遺風」であると考える。したがって、日本にそうした伝統がなかったことをむしろ誇りとするべきで、「蛮風を移植する」必要はない。第二の点について朝永は、立場が入れ替わった場合を考えればわかるように、報復や遺恨の感情をロシア人の中に惹起するような行為は、人道上も利害上も好ましくないと主張する。したがって、日露戦争後日本にできた凱旋門の多くが一時的なものであるのは、喜ばしいことである。「既に凱旋が済んだ以上はさっぱりと之を打毀してしまつて其跡形をも残さぬ様に仕たい。而して吾々は斯る歴史上に新時期を開くに足る様な大なる意味を有する戦勝を贏ち得ながら凱旋記念の影をも留めぬといふことを以て寧ろわが誇りとしたと思ふ」というのが朝永の結論である。

後年、朝永はここでの主張を、後年の平和論への関心の原点の一つと位置づけている。しかし、改めて検証し直してみると、この議論は平和論というよりも、日本は西洋の文物のどのような部分を取り入れるべきであり、どのような部分は拒むべきかという、「西欧の衝撃」下での文化触変に対する自覚的な取り組みの必要性を論じたものである。朝永の日本人と哲学との関係を論じるこの種の議論は、概してこうした目的を持っていたのである。

朝永の議論はやがて、二つの方向に収斂していく。第一の方向性

は、日本及び日本人が取り入れるべき哲学として、個性主義、人格哲学の検討をふまえ、英・仏・独の同時代的な思潮を比較検討し、明治以後のそれらの思潮の流入過程を歴史的に振り返った上で、新カント派理想主義とヘーゲルのな哲学を基礎に置いた、イギリスとドイツの調和的な導入、という結論を提示することである。

この議論を、留学前の代表的な作品、「西洋に於ける没我思想と自我思想との消長と民族的分布とを述べて我國の思想に及ぶ」<sup>12</sup>に即して見てみよう。朝永は、日本の哲学受容史を次のようにふりかえる。まず、維新後最初に輸入されたのはミル、ベンサム、スペンサーといった、イギリスの「決定論的、自然論的の形而上学、功利的の倫理説、個人主義の政治論」「自然論的及び個人主義的思想」であり、これは日本の啓蒙と旧習の打破に大きく貢献した。それとは別に、ヘーゲルのな国家主義の政治論より先にルソーの個人本位の政治論が輸入されたことも、「陋習打破の屈強なる武器」となった。

その次に輸入されたのは、ヘーゲル、ロツツェなど、ドイツの絶対的唯心論や普遍主義思想である。これは旧習一掃がほぼ完成した後、つまり「破壊の後の建設」を行う上でふさわしかった。しかもこの思想、とりわけヘーゲルの思想は「政治上、道徳上、『普遍』を重んずるといふ点」「宗教上、唯心論的、汎神論的にして神秘的傾向を有する点」で「東洋風」である。それ故に日本人は、「独逸思想を通じて東西の思想間に密接なる類縁があるといふことを発見し、独逸思想に於て東洋思想の学理的弁護を発見し、順序を転倒しては居るが欧州思想を介して自家固有の思想、自家固有の国体、制度、

慣習等に価値と真理とを発見するに至った。

しかし初期に導入された個人主義は失われることなく、今度は「この絶対的唯心論を継承して更に人格の觀念を高調する英国の自我實現説の倫理説」や、個人本位のプラグマティズム、「普遍」を排斥して人格の自由と威厳と、實在とを主張する人格的唯心論が輸入されて、現在に至る。

こうした日本における西洋思想の受容史を考えてみると、それらの思想はいわば「对症下药」的であり、「血肉」となっていない面がある。日本は西洋思想に対する「国民的偏向」を持っていない。それは「比較的虚心坦懐に是等の思想を玩味し、批判し、其短を捨て、長を採ることが出来る又た同様の態度を以て東西両洋の思想をも調和融合することが出来る」点では長所である。しかし、このことは同時に、「自分に強固なる統一が無い」ことを示している。日本人は、過去の思想のみに従つて生きていくことはできない。かといつて、西洋人の血肉となつている思想を「コンテキスト」抜きに取り入れていくため、西洋の思想が「一時の清涼剤や对症下药」の域を出ないという意味では不幸である。

では、日本の哲学の課題は何か。それは一言で言えば「人格本位説と絶対論との輸贏ゆいぎ若くば調和」である。この問題は、外国から移植された二つの思想をどう輸贏し調和させるかという意味でも、「吾邦若くは東洋風の『普遍』本位的傾向と西洋の個体本位的傾向との輸贏と調和という意味でも重要である。朝永は、将来的にはこの問題は「充分に主意説や經驗説を取り入れたる絶対論」の哲学、とい

う方向性が有力になると考える。

その理由は、第一に汎神論的・絶対論的・神秘的・没我的であるドイツ思想は「西洋思想中最東洋思想に類縁を有するもの」であり、これは「東洋が西洋と共に有する旧くして新しき真理である」と考えられるためである。第二の理由は、既に述べた通り、自我思想は近代社会の形成に必須であるからである。

かくして、日本において「人格論に即したる絶対論、主意説に即したる主知説」に基づいて、「独逸思想に英の思想を類化し、又西洋風の個人主義をば東洋風の『普遍』主義に類化することが出来はしまいか」というのが朝永の結論である。ただし、あくまで基礎に置かれるべきは絶対論であり、個人主義ではない、という留保を付している。

この論文で、朝永は、哲学史的探究に基づき日本が成し遂げていくべき哲学的課題を明確にする、という、デビュー以来からの課題に一つの解答を見いだした。すなわちそれは、新カント派的な哲学史理解に基づき、ドイツ流の絶対論に基礎を置きつつ英米の人格哲学を取り入れていく、ということである。この見解が留学を挟んで、『我』の自覚史へと引き継がれるのである。

ここでの哲学史理解と結論は、朝永の留学以後の仕事の原型が、すでに留学以前に完成していたことを示している。同時に、朝永は、学問形成の当初から新カント派の立場を取っていたのではなく、欧米の同時代的な諸思潮の幅広い検討と取捨選択を経て、自らが、そして日本及び日本人が取るべきであると自らが考える立場として、

新カント派の理想主義を選び取ったということの意味しているのである。

朝永の議論の第二の方向性は、こうした哲学の取捨選択が可能になるための前提として、国際関係における主体の単位と文化の単位が、どのような構造の中で対応しつつ存立しているかを定式化しようとする、という意味での、国際文化論的な世界認識であった。日本及び日本人が、欧米諸国の哲学を取捨選択し、独自の哲学的立場を確立する、という資格を得るためには、主体としての日本や日本人が、欧米諸国と同等の資格をもつ主体として、固有の文化を保持し、この世界に存立しなければならぬ。「凱旋門論文」や「自我・没我」論文が成り立つためには、そうした世界観を安定的に構築しなければならぬ。日本もその一員たる、対等な主体間の文化の交換が成り立つ世界を弁証するために、朝永は、前出論文でも見られた「類化」と「応化」といった概念を用いて、文化の受容と変容のメカニズムを描き出そうとしている。

かくして、留学以前の朝永がめざしていたのは、いわば、「近代日本の哲学的形成」とでもいうべきプロジェクトの完遂であった。後年の回顧の中では、鹿鳴館時代の狂躁を目的の当たりにした若き日に、日本を「大に日本文化を高揚せしめて民族の優秀性を表現せんと」の目的を以て遂に哲学を志望するに至った」と述べたという。<sup>(15)</sup>その真偽の程度はさておき、朝永の活動の力点は明らかに、世間から超絶した純学究としてのそれであるのではなく、新カント派理想主義に集約される、日本や日本人が取るべき哲学的立場の考察と、そ

の哲学的立場を可能とする対等な主体間関係に基礎を置く、一主体—国家—文化の図式が成り立つ、国際文化の機軸の考察にあつたのである。

### (3) 留学と留学後

その後、朝永は一九〇九—一三年にかけて欧州に留学する。通説的に知られているのは、第一に、朝永がヴィンデルバントに師事し大きな影響を受けたことであり、第二に、留学後、それまでに刊行した全ての著作を絶版にしたこと（実際には最初期の『哲学辞典』『哲学綱要』は引き続き刊行されていた）であり、第三に、留学以前に書いていたような文明批評的著述がほとんど見られなくなることである。

第一の点に関しては、実際には、ヴィンデルバントの講義を聴講したのは実質半年強に過ぎず、個人的な指導はほとんど受けていなかった。加えて、ベルリンなどドイツ国内、イギリス、フランス、イタリアなど各地に比較的長期に滞在していたことなどからみると、通常想定されるような師弟関係ではなかったことがわかる。<sup>(16)</sup>「ドイツでは多くの学者にあつたが、すこしもセアトリカルなところのない、高僧のような風格のヴィンデルバントに一番頭が下がった」、「ドイツでヴィンデルバントについて見て、僕のような力ではとても大学教授など勤まるものではないと痛感した」、<sup>(18)</sup>といった言葉が示すように、むしろ朝永が感銘を受けたのは、教師として学究としてのヴィンデルバントの生き方のほうであり、それが、第二の点、第三の点にみられる変化を朝永にもたらしたのである。

では、留学以後の朝永の議論は、留学以前の議論と完全に断絶していたのであろうか。答えは否である。むしろ朝永は、留学以前に半ば選び取り留学によってさらに確信を深めた理想主義哲学の立場を、純学術的な考察の枠内で探究し、ヴァインデルバントに影響を受けることによって自らに課した謙抑の姿勢に基づき、教育活動や執筆活動によってそれを啓蒙するという戦線の移動を行ったのである。

留学後の講義をもとに、ヴァインデルバントの死を悼みつつまとめた『近世に於ける「我」の自覚史』<sup>(20)</sup>は、このような変化を経て完成した作品であった。しかし、その内容や枠組みのほとんどは、留学以前の「自我・没我」論文で既に完成していたものであり、「絶版」が意味するのは朝永の、信念に基づく姿勢の転換だったのである。『我』の自覚史』にはただ一カ所、ルネサンス期を明治維新期になぞらえている議論<sup>(21)</sup>が残っているが、これは留学以前の文明批評的な議論の単なる残滓である以上に、朝永が、数百年にわたる西洋近代の哲学的経験と、数十年に亘る近代日本の哲学的経験とを等価なものとして見据える、留学以前の、西洋哲学史をもとにした近代日本人論という視座が、後世から見ると単なる概説であるかの如く見える同書にも貫かれていたことを示す痕跡であったのである。

留学後の朝永が新たに直面したのは、ドイツを敵国とすることになる、第一次世界大戦の勃発であり、具体的には、この時期高まつた、自らが依拠する、日本の観念論哲学の総本山であるドイツの軍国主義に対する辛辣な批判、さらに、そもそもドイツ哲学は軍国主

義かつ好戦的である、という批判であった。朝永はこれに対して、「思想上の国産奨励論」「独逸思想と軍国主義」といった諸論文、さらに『我』の自覚史、および関連論文を収録し、『我』の自覚史』と同年に刊行した『独逸思想と其背景』<sup>(22)</sup>に対する書評への応答である。「拙著の批評に対して」において、反論を試みる。

「思想上の国産奨励論」<sup>(23)</sup>は、「独逸思想と軍国主義」の前編をなす論文である。ここでは「類化」「応化」論に依拠し、常に外来の思想を取り入れ吟味していくことが民族の健全な発展をもたらす、という仮説に基づき、「思想上の鎖国は思想上の自殺である」と排外的、閉鎖的な風潮を批判する。思想に対する評価はつねに、対等の立場から、その内容に関して「真に誠実なる思索的良心」「広義の良心」にもとづいて慎重になされるべきであると主張した上で朝永は、文化の受容と交換の一般的枠組を展開する。

つづいて、同論文の後半から後編たる「独逸思想と軍国主義」<sup>(24)</sup>において朝永は、(1) カント、(2) カント以後特にヘーゲル以降、(3) ビスマルク以降のドイツ、の三者間に線引きを行うことでドイツ思想と軍国主義との関係を考察する。すなわち、ドイツ理想主義の原点にあるカントには軍国主義的要素はなく、むしろ反軍国主義である。続くフィヒテ・シェリング・シュライエルマツハーらのロマン主義は、軍国主義的思潮を胚胎しているもの、カントとヘーゲルの両方の要素を持つ、一種のグレイゾーンに属している。そして、ヘーゲルに至って、初めて軍国主義的要素が明確になる。ただし、ヘーゲルの軍国主義は、「侵略的軍国主義」ではなく、あくまで

「国家によって代表さるゝところの人文を擁護せんが為の軍国主義」である。しかし、ビスマルク以後になると、理想主義に変わって速成主義、現実主義が跋扈し、理想主義から離れた軍国主義が育っていき、「人文国家」が「権力国家」と化したのである、という解釈をとるのである。

この一連の議論の中ではじめて、朝永はカントの「永久平和」について言及した。<sup>(25)</sup>これが、『カントの平和論』の原点なのである。朝永のカントの平和論は、第一次大戦後の連盟主義的な主張の流れに乗じて書かれたものではなく、第一次大戦中のドイツ思想の軍国主義性批判を擁護する文脈の中にその出発点があったのである。

とはいえ、朝永は絶対的平和論者ではなかった。「拙著の批評に對して」<sup>(26)</sup>で朝永は、自己の戦争観を表明している。第一に、理想主義の精神と戦争は、その根本理念において背馳しない。「義勇、廉恥、真摯、忠誠、犠牲等の精神が根本源的な、直接的な、而して最終精彩ある形を以て現はるゝものが戦争である」という主張には、「単に日本人として、又は一個人として、武士道の郷土に生れ又は武士氣質の家庭に人となつた結果として、感情上此見解に深き同情を有する」。また、現実の利害得失を超越した絶対的価値へ自己を捧げることで精神的な生活又は永遠的生活に入る、という理想主義の根本精神からみても、戦争を肯定せざるを得ない。

第二に、ただし戦争の善悪は、そのような価値や目的のためのものであるかによって決まる。したがって戦争は「正宗の名刀」であつて、理想を実現し人文を擁護するものとなることもあれば、理

想を隠蔽し人文を破壊するものともなる。朝永は一切の戦争を否定するのではなく、悪用された戦争、理想主義が単に「モラル・ジャステイフィケーション」としてしか意味を持たないような戦争を拒んでいたのである。

朝永が留学後新たに直面した、この同時代的な論争は、それが自らの社会的、学問的立場そのものにかかわるが故に、留学前の時事的問題とはまた別の意味で、自己の学問的思想的アイデンティティにとって直接的に、深刻な問題であつただろう。しかし、これらの著作を『独逸思想と其背景』に収録するにあたり、朝永は、本来前後編をなしていた「国産奨励」論文と「独逸思想と軍国主義」論文を切り離し、相互の関係について言及すらせずに、別々に配置しているのである。その結果、『独逸思想と其背景』は第一次大戦下の事後的関心に対して朝永なりに思索した仕事、という性格をぬぐい去つた、『我』の自覚史』の姉妹編、といった、純学術的な色彩の著作として世に出ることになった。さらに一九二三年に同書は、「国産奨励」論文を除いた内容が、そのまま『我』の自覚史』改訂五版に吸収合本された。これによって、自己の著述から事時的な色合いを消していく朝永の「改鑄」作業が、完成するのである。

## 二 『カントの平和論』

### (1) 『カントの平和論』の成立

その後朝永は、一部の事時的な短文を除けば、フイヒテ、カーライル、デカルト、ロツツエを中心とした基礎的な研究に専念する。

一九一九年には病身であること、ヴィンデルバントに比した自己の非力を慨嘆し、二千年の哲学史をとでもやりとげられない、などの理由から、京都帝国大学を辞任し、師範学校で教育活動に専念しようとした。しかし、同僚たちによる、とりわけ特に信頼し合っていた盟友である西田幾多郎の「余の友よりよき友は多かるべし 併し余の妻は余の妻にして 余の友は余の友なり」という言葉に集約される、心を尽くした慰留もあり、大学に踏みとどまることを決意した。「カントの平和論」は、こうした人生の分岐点を乗り切った直後の朝永が取り組んだ仕事であったのである。

他の多くの著作と同様、『カントの平和論』は講演をもとにした諸論文を發展統合することによって成り立っている。第一の論文は「カントの永遠的平和論の半面」(一九二二年)<sup>(28)</sup>で、これは議論の基本的な方向性と、『永遠平和のために』以外の文献、および『永遠平和のために』の予備条項を中心とした考察である。第二の論文は、『カントの平和観に就て』(一九二二年)<sup>(29)</sup>で、確定条項と追加条項第一までを扱っている。第三の論文は、『カントの平和論』(一九二二年)<sup>(30)</sup>で、第一、第二論文を統合の上、更に書き加えた内容であった、これがほぼ同内容の単行本『カントの平和論』<sup>(31)</sup>の主編となった。通説的見解との関係で言えば、『カントの平和論』には次のような特徴がある。第一にこの著作はいわゆる『永遠平和のために』のみの解説本ではなく、カントの哲学全体の中で、彼の平和に関する哲学的立場を体系的に再構築しようとした、日本で最初の本格的な仕事である。第二に、既に見てきたように、朝永の議論はそもそも、

第一次世界大戦中のドイツ哲学擁護論を出発点としており、第一次世界大戦後のウィルソニズムや国際主義、連盟主義に便乗するような立場は一切取っていない。むしろ、戦後の平和に対する希求がどちらかというど感情的、博愛的になりがちであることに警鐘を鳴らすことに力点があつたのである。

『カントの平和論』を執筆した動機として、朝永は「序」で、第一に、留学以前の「凱旋門」論文、第二に、留学以後の「独逸思想と軍国主義」、第三に、論文名はあげないものの「拙著の批評に対して」にふれて、平和に対する自己の関心の持続性を示そうとしている(ただし、「国産奨励」論文には言及していない)。しかし、これまでの検討から明らかのように、これらの論文で第一義的に論じていたことは、平和論ではないのである。では、『カントの平和論』は一見概説・紹介のような体裁を取りつつ、朝永の思想の内在的な發展の中で、どのような意味を持っているのであろうか。

(2) 「国際」を棄てるか「国家」を棄てるか 世界国家の可能性  
『カントの平和論』における朝永の議論で注目する点は、第一に、カントとヘーゲルの間の線引きの明確化、である。これは、国家より個人を優先する一八世紀的な思想と、個人より国家を優先するロマン主義以降の思想との間の線引きである。すなわち、カントとヘーゲルは線引き可能であるが、カントの中にはヘーゲル的なモメントがすでに胚胎している。しかしカントは、それを哲学としては体系化しきれない、という立論である。この主張は、前述の通り、第一次大戦期のドイツ哲学の軍国主義性を否定しようとし

た際に見られたが、『カントの平和論』ではさらに重要な意味を持つことになる。

第二の、そして最も重要な指摘は、原稿が完成に近づくにつれて長大化していった、第二確定条項をめぐる考察、とりわけ「世界国家の不可能性」に関する考察である。通常、カントのいう、「地上のあらゆる民族を包括するにいたるであろう国際国家 (civitas gentium)」<sup>(32)</sup>は、世界国家や世界政府を意味せず、国際連盟のような主権を維持した緩やかな連合体以上のものではない、と解釈するのが定説である。その根拠としては、「一つの世界共和国」という積極的理念の代わりに（もしすべてが失われてしまわないためには）戦争を防止し、たえず持続的に拡大する連盟、という消極的代用物のみが、法を恐れ敵意をはらむ傾向性の流れを阻止できるのである<sup>(33)</sup>という、いわゆる「消極的代用物」論を挙げることがほとんどである。それに加え、国家が巨大化してしまおうと統治が困難になる、あるいは「好戦性」「自然 (Nature)」の作用による諸国家の分立、といった第一補説の目的論的な説明が援用されることが多い。

しかし朝永は、「消極的代用物」では満足しなかったし、こうした目的論説明の理論的価値は低いとして、これらの説を採用しなかった。それどころか、カントは理論的には、世界国家の可能性を認めざるを得ない、と論じているのである。確かに、もし多数の国家が「其自主権を維持しつ、一の国家に結びつく」<sup>(34)</sup>形で国際国家や世界共和国が実現することは、国家の人格的自律という観点から見て、明らかに矛盾かつ不可能である。しかし、もしそれが「諸国家が全然自

主権を放棄し其障壁を徹して一の国家に融合したものを仮りに国際国家と呼び（此場合国際なる語は最早不適當であるが）、その範囲が拡大の極に達したものをば世界共和国と名「付」くるならば、其れは明かに矛盾ではない<sup>(35)</sup>のである。

そう考えた場合、諸国家の分立という状態までで世界形成が止まらざるを得ない、と言っている根拠が無ければ、カントの議論は首肯しがたい。自律した個人が集合して国家を形成すると同様に、自律した国家が集合して国際社会を作ることには止まらず、さらに世界国家を作る、という論理を止めるには、個人よりも国家を優先するというカントの哲学体系が、論理としては体系化していないことを、カント自身が認めていたと解釈する他ない。

従つて数多国家が其自主権を維持しつ、相対立するといふことと自体に何らかの意義が認められるれば兎に角、然からざる以上斯くの如き意味の国際国家又は世界共和国を不可能とする理由はない。前の意味に於ける国際国家の不可能なる理由は「國際」と「国家」が矛盾なるが故であるから、吾々はカントが為したやうに「國際」に余地を与へんがために「國家」を棄て、唯の「連盟」となし國際連盟を考へることも出来るが、併し又た「國際」を棄て、「國家」を残し後のやうな意味の国際国家又は世界共和国を考へることが出来る。後者を不可能とせんが為めには「國際」を棄てることが不可能であるといふこと、即ち数多国家が其自主権を維持しつ、相対立するといふことと自体に何等かの意義を有するといふことが示されなければならぬ。

国家間の戦争を防止する道としては国家の対立状態を撤廃すること、従つて後の意味に於ける国際国家又は世界共和国の実現が最端のな道である。よし其実現が困難なりとするも理念として之を掲示するは毫も不可でないのみならず、専ら *quid juris* を問題とするカント哲学の精神によく契合したことでなければならぬ。<sup>36)</sup>

「消極的代用物論」に基づいた解釈が示すように、自律した主体である国家が集まつて、それらを下位に置く存在のもと統合されることは、国家の定義上認められない。しかし、自律した主体でありそれより上位の主体へと統合され得ない、という国家に対する所与の前提自体を棄てれば、世界国家は実現可能である、と朝永は考えるのである。朝永の言葉を借りれば、「国際国家」は、「国家」を棄てて連盟や連合となることもできれば、「国際」を棄てて世界国家となることもできるはずである、ということになる。

ところが、にもかかわらず、朝永は世界国家の側に立たない。そして、ここにおいて、先ほどの、カントとヘーゲルは区別可能であるものの、ヘーゲル的な国家優位の思想がカントの内面に準備されていたのではないか、という一連の議論が生きてくるのである。そこで朝永は、カントが論理としては世界国家を認めつつも、主権国家を基礎的な単位とする世界の分立が是であるべきであると考えている証拠として、「国民的者の意義」<sup>37)</sup>を認め、「数多国家が其自主権を維持しつゝ、相対立するといふことと自体に何等かの意義を有する」とカントが考えていた傍証を何とか集め、世界国家の可能性を「封

じ込め」ようとする。

とはいえ、朝永が持ち出す論拠はあまりに貧弱であった。目的論的考察を使えないと考えたのは朝永の学的な良心からであるが、質問の分立性を諸国家の分立性になぞらえた比喩を逆用したり、民族の独自性の考察といった枝葉末節に近い記述を拡大解釈したりするその考察の説得力は、ひいき目に見ても高いとは言えなかったのである。にもかかわらず、カントに依拠した世界国家の不可能性に関する朝永の「封じ込め」は、その理論的な脆弱さを抱え込みながら、同時代においても後の世代においても解かれることのないまま、現在に至るまで強固に維持されていく。この封印は、近代主権国家体系を前提とした世界のあり方の正統性が、究極的にはトートロジカルにしか論証できないことをも示しているのではないであろうか。

### (3) 『カントの平和論』の意義

近代日本におけるカントの平和思想に対する解釈の系譜をたどってみると、朝永以前には西周、中江兆民、加藤弘之といった人びとが代表的な存在である。<sup>38)</sup>しかし彼らの解釈は、基本的に自己の現実認識やそれに基づく主張を補強するための、どちらかというところ、桑木敏翼らが議論を発表しており、朝永の解釈とは異なる部分もあるにせよ、その体系的な緻密さは朝永の域には達していない。<sup>39)</sup>また、鹿子木員信のように、「永遠の平和」どころか「永遠の戦」こそ世界の真相である、という主張や、亀谷聖馨のように、孔子やキリストとカントを比肩するかのような著作も登場していた。<sup>40)</sup>

朝永にとって、『我』の自覚史』と『カントの平和論』は、自己の哲学的立場や思想的立場を、西洋哲学史の記述やカントの体系的記述によって包括的に表現した両輪であった。『我』の自覚史』においては、過度な同時代的インプリケーションを露わにする留学前の手法を避けつつも、日本及び日本人が拠って立つべきであるとな彼が信じるころの哲学的立場の歴史的形成と基本構造を解明し、西洋哲学史理解の基礎文献として多くの学生や研究者に愛読されたことで、朝永は、近代日本の哲学的形成の文脈設定者 (contextualizer) としての役割を果たした。

一方、『カントの平和論』は、カントの議論の体系的概説という形を取りつつも、日本及び日本人の主体としての、国際的な分立構造の中での安定的な地位の保証、という以前からの問題関心を反映した著作であった。『我』の自覚史』の歴史解釈を規定していた理想主義的哲学史理解が依拠するところの近代的な世界構成、すなわち、自律した、自我を持つ個人が社会契約的に国家を構成し、自律した、主権を持つ国家が国際社会を構成しているが、諸国家は世界国家となることはない、という「この世界のできあがり方」を提示することで、近代的自我を持った人間が国家、世界とどのような関係の中で存立しているのか、を定式化したのである。

かくして、近代日本の国際関係認識は、専門的な社会科学としての国際関係論が立ち上がる直前に、やはり専門分化する直前の、日本というネーションを近代世界に安定的に定位するという目的を明確に持って、世界観、人生観としての哲学を学び、考え、論じた哲学

者によって、その基盤が据えられていったのではないかと、いうのが、朝永三十郎の歴史的役割に関する、本稿の中心的な主張である。

### 三 国際関係認識

#### (1) 「ボロつくるい」 晩年の朝永

その後朝永は半年間のドイツ出張の後、カント生誕二〇〇周年記念の際の論考の他、デカルト、ルソーを中心としたカント以前の近代哲学史の系譜を丹念にたどる仕事を続けた。一九三一年には京都帝国大学を定年退官し、大谷大学などで引き続き教鞭を執りつつ、戦中期を過ごし、終戦を迎えた。この時期の朝永が病身を押しつづ力を傾注したのは、『我』の自覚史』と『カントの平和論』の数次に亘る改訂増補作業であり、これを本人は自嘲して、「ボロつくるい」と呼んでいた。

戦後に入ると、『哲学史的小品』『ルネサンス及び先カントの哲学』といった最晩年の研究の集大成となる著作を刊行した。その一方で、『我』の自覚史』を一九四六年、四七年、四八年、五〇年に、『カントの平和論』を一九四七年、五〇年に改訂再版した。『カントの平和論』は、表記を現代風に書き改めた他は、ほとんど変更点はないが、『我』の自覚史』は特に四八年版において大幅な改訂を加え、『カントの平和論』との関連づけを明確にすることで、両著の結びつきが強固となった。さらに、以前より朝永が関心を持っていた、仏教と神秘思想との関係に対する考察も、晩年の浄土真宗への傾倒も手伝って、盛り込まれている。

これらの諸版は、併收論文も微妙に異なり、新たに書き加えられていった「序」からは、当時の朝永の感懐を知ることができる。そこからは、朝永が依然として「理性の哲学」の可能性に賭けており、ふたたび敗戦国となったドイツが理想主義をもとに再帰することを望んでいることや、ドイツ軍国主義と「ゲルマン文化」を同一視することへの批判など、戦前とまったく異なる視点からの議論を行っていたことがわかる。

## (2) 〈自我・国家・国際関係〉

近代日本思想史・哲学史の観点から見た朝永三十郎の最大の意義は、彼が近代日本の哲学的形成に貢献し、西洋哲学理解の文脈設定者としての役割を果たした、という点にある。それはいわば、「西洋の衝撃」期における、概説者・紹介者であるが故に持ちえたオリジナリティである。すなわち、常に曖昧でゆらいできた近代日本のネーションとしての自意識を、仮にはあれ安定させるような世界理解の基盤となる哲学史理解の文脈を定礎し、それを教育・言論活動によって知識層に定着させたこと、である。こうした、近代的な主体観、世界観、アイデンティティを「安定させる側」の考察や吟味は、アジア主義や「近代の超克」論といった「ゆらぎ」の側の研究に比して、これまで十分になされてこなかったと思われる。

朝永三十郎の歴史的意義は、それだけには止まらない。近代日本の哲学的形成を追究する中で、朝永が取り組んだのは、単なる哲学上の概念整理でもなければ、哲学史の解説でもなかった。朝永が西洋哲学史研究を志したのは、日本や日本人が安定的にこの近代世界

の中で自己を認識し確立できるような世界観的前提、ないしは認識論的な機制を打ち立てるといふ、いわば「実用的な目的」<sup>(4)</sup>のためであった。その際に朝永は、個人だけを他と切り離して定式化したのでもなければ、国家だけを他と切り離して定式化したのでもない。個人・国家・国際関係を同時に、有機的に、相互参照的・循環参照的に関連づける連関を定立せざるを得なかったのである。

それは約言すれば、自立し自律した自我に根ざした個人、そうした個人が構成する国家（社会）、そしてそうした自立し自律した国家が構成する、世界国家へとは解消され得ない、という条件付きの国際関係（社会）の三層構造である。これを暫定的に〈自我・国家・国際関係〉と名付けよう。これが近代の世界観を規定する相互参照的・循環参照的な機制であり、近代において「国際関係とは何か」を問い、考える際の枠組みである。近代国際関係認識は、それを受け入れるにせよ批判するにせよ、この機制に基づいた世界のあり方を、否応なしに前提としていたのである。

もちろん、〈自我・国家・国際関係〉は仮構された理念である。しかも、カントの個人本位の考え方に即して考えると、朝永が気付いたような論理的な弱さを持つている。しかし、朝永は、その弱さをあえて封じ込めて、自らが直面していた時代の現実と真摯に向き合う中で、半ば偶然に、そして半ば必然に、この世界のあり方の説明の仕方を仮構したのであった。そして朝永の後継者は、これを一から構築し直すのでもなく、また朝永が世界国家の問題に集約され

る、この図式が持つ難点を封印したことを再吟味することもなく、この枠組みを所与のものとしてとらえ、さらに強化しようとしたのである。

### (3) カント読解の系譜の中の朝永

このことは、朝永以後のカント読解の系譜を瞥見してみると明瞭となる。カントをもとにして国際関係や世界を語る議論の直系と言えるのは、南原繁の「カントに於ける国際政治の理念」と、その改稿版である「カントにおける世界政治の理念」である。<sup>(45)</sup>ここで南原は、私の自律という朝永の『カントの平和論』をほぼ踏襲した理論構成で「世界国家の不可能性」の議論までたどり着く。にもかかわらず、そこでは「消極的代用論」以上には踏み込まず、そこから更に、カント的立場から一歩進んで、フィヒテ以降の民族概念に依拠した民族国家論を押し出し、世界連邦国家の妥当性を論証していく。朝永が封じ込めた理論的可能性に関しては、その「封じ込め」を踏襲して近代国際関係の構造を説いているのである。

また、朝永の教えを直接受けていた、高坂正顕の戦後の議論をみても、もはや朝永の「封じ込め」には言及せず、世界公民社会に即して、世界共和国を積極的理念、統制原理とみなし、国際連盟を消極的代用物、構成原理、ないしは「図式化された理念」とみなすこととで処理しており、朝永の論点には拘らない。両者以降の、戦後のカント研究者たちの解釈の系譜をみても、朝永が施した「封印」を解いて、「国際」を棄てるか、「国家」を棄てるかという選択肢が開かれたものであると考える論者はほとんどいなかった。むしろ、暗

黙の前提としてそこには立ち入らず、「封じ込め」に基づくカント解釈、理解を揺るぎない前提とみなし、「世界国家」の可能性／不可能性は考えないでよい、という姿勢が標準的作業手続(SOP)となっていたのである。<sup>(47)</sup>

もちろん、特に一九七〇年代以降、諸国家の分立に基づいた国際関係のみで世界を考えることの自明性に異を唱えた論者が、いなかったわけではない。馬場伸也や最上敏樹氏といった論者が、トラスナショナルな活動、非国家行為体の活動、人類益に基づく地球社会、地球文化の可能性について、見解を表明し続けてきた。<sup>(48)</sup>しかし、それらの議論は、既存の近代国際関係認識を超克し得たとは言い難い。

その理由として、第一には、現実の変化が彼らに追いついていなかった面もある。第二に、そしてより重要なこととして、彼らが多くが「国際関係」だけを抜き出したり、あるいは地球全体のレベルを一気に変革することを試みたりしてきたことにあるのではないであろうか。近代国際関係認識が、「自我・国家・国際関係」という認識論的機制の中で観念され、考えられてきているとするならば、世界を構成する諸水準と「国際関係」の相互連関を解きほぐしていくことがむしろ現在、そして今後、必要なのではないかと思われるのである。

これと同様のことは、英語圏におけるカントの平和論理解にもあてはまる。一九世紀から今日に至る『永遠平和のために』の受容過程とその特徴を通観したイーズレー<sup>(49)</sup>によれば、カント読解の系譜

は、一九世紀中盤から二〇世紀中盤の国家を超える秩序に基づく平和（パターソン）と、一九五〇年代以降の国家中心的な平和（パターソン）に分けられる。パターソン一は、主権の制限・放棄をもとにした国際国家の形成をめざすフェイズ二と、主権を制約するものの連邦・連盟にとどめるフェイズ二に分かれる。いっぽう、パターソン二は、国家主体の自主性や不可欠の重要性を強調するフェイズ一と、民主主義の平和論が代表するフェイズ二に分かれるという。

イーズレーは、パターソン一からパターソン二への移行をもっとも大きなモメントととらえている。しかし、ここまで見てきたとおり、国際関係認識研究の視点、この世界がどのようにして出来上がっているのかをいかに理解し、説明するか、という視点に立てば、決定的なのは世界国家を放棄し、不可能とみなした瞬間ではないであろうか。イーズレーの仕事と彼が引用する諸文献を見る限りでは、英語圏での不可能性のモメントがどのように生じたのかは定かではない。しかし、これまでの考察を踏まえると、カントの国際関係研究上の最大マクロ的な意義は、いわゆる「カント的イメージ」「民主的平和論」などとの関連のみではなく、近代世界の構成のされ方やそのメカニズムに対する認識の集約的な反映という点に存するのではないか、と思われるのである。

## おわりに

本稿では、第一に朝永三十郎の歴史的意義を近代日本思想史・哲学史の中で明らかにすることを目的とし、朝永が単なる受け売りの

概説者ではなく、近代日本の哲学的形成というナショナルな課題を背負った、西洋哲学史理解の文脈設定者であることを明らかにした。これを体現したのが『我』の自覚史であった。

また、後世から見れば単なる解説や紹介に見える仕事に、朝永の同時代的な問題意識が色濃く投影されていること、さらに、逆説的であるがそれが概説や祖述に近いものであるが故になおさら、その構築の仕方に朝永の、学術的良心を逸脱しない範囲での独自性を見出すことができるのを見てきた。朝永の仕事は、シュウォルツの描き出した厳復ほど「翻訳」に特化したり持論を挿入したものではなかったが、その一方で、厳復同様、西欧列強と対峙しつつ近代の立ち上げ期にあった自国と自国民をどのように形成していくべきか、という規範的な意識を強く持つて成し遂げられたものであったのである。<sup>(50)</sup>

近代日本の哲学的形成と同時に朝永が弁証しなければならなかったのは、日本ならびに日本人という主体が近代世界の中で安定的に存在し、「人文」を交換し、共存し続けることができるような世界のあり方であった。この世界像に関して、『我』の自覚史<sup>(51)</sup>と関連づけつつ基本構造を導き出したのが『カントの平和論』であった。この議論の背景には、「凱旋門」論文をはじめとする留学以前の連続の議論、留学後の第一次世界大戦下のドイツ哲学擁護論といった時事的な問題関心が複雑に投影されていた。『カントの平和論』は、こうした研究履歴の延長線上に、一見平和論の解説に見えながら平和論にとどまらない議論として成立したのであるが、朝永自身の留

学後の姿勢の転換なども手伝って、そうした複雑な背景や意図が見えにくい仕事になっていったのである。

最後に本稿では、朝永がカントに託して提示した世界構成を（自我・国家・国際関係）と名付け、近代国際関係認識はこの、カントに拠る限りでは難点があるが、人々の世界認識を支える上で極めて強力な力を持つ枠組みによって支えられ、安定してきたのではないかとこの仮説を提起した。この概念構成自体、さらなる洗練が必要であるが、国際関係研究のあり方そのものとこの概念構成は密接な関係があり、この仮説をもとに国際関係研究（国際政治学、国際関係論などを含む総称）という学知の歴史的特質を説明していくことも、今後の課題となる。

一例をあげよう。たとえばケネス・ウォルツの初期の仕事、*Man, the State, and War* (1959) が提示した三つのイメージ論は、（自我・国家・国際関係）という認識論的機軸の裏返しでもある。<sup>(51)</sup> ウォルツの議論は、国家間戦争の原因追及という限定的な目的を持っていた一方で、イメージ間の相互作用に関する考察を含んでいたはずである。しかし、三つのイメージを分断して研究領域を限定する「分析レベル論」は、その理論の射程を国際関係現象一般へと拡大する一方、イメージ間関係をやや矮小化して還元することになった。また、ウォルツ自身も、国際システムレベルのみに焦点を絞った構造的リアリズムへと進んでいく。

しかし、こうした分断・限定と一般化の射程の拡大による理論的「発展」が可能なのは、分断・限定を可能にし、許容する（自我・国

家・国際関係）という有機的連関が予め想定され、共有されていることの効果なのではないであろうか。本稿の扱う範囲を出るが、朝永三十郎をもとにした考察は、翻ってウォルツや欧米の国際政治学の依拠する国際関係認識、ないしは世界観の形成史へと接続し得るように思われるのである。

この「世界のできあがり方」に関する考え方は、有期なものであり、現実との変化とともに変化する。とすれば我々は、（自我・国家・国際関係）に代わる新たな認識論的機軸を、新たな現実との関係において見出すことに努めなければならないであろう。そうすることは、国際関係研究という知のあり方、ひいては社会科学、人文科学全般の知のあり方の再編成を促すことになる可能性があるし、国際関係研究という立場から世界を考え、論じていくことに貢献する知的営為としての意義を持つ、というのが筆者の見通しである。

(1) 本稿は、「日本における近代国際関係認識の原的形成 朝永三十郎と（自我・国家・国際関係）」（東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻博士学位論文、二〇〇七年二月）の論旨を簡潔に総括し、日本政治学会二〇〇七年度研究会自由論題P政治思想（二〇〇七年一月七日）において報告した内容に基づいている。関連する文献として、「（自我・国家・国際関係）文化としての国際関係認識研究序説」「国際社会科学」第五二輯、二〇〇三年三月、「朝永三十郎のカント論 近代日本の哲学的形成と国際関係認識形成の原的交錯」「国際社会科学」第五三輯、二〇〇四年三月、「国際関係認識と朝永三十郎」「創文」第四百七号、二〇〇七年五月も参照されたい。

- (2) この点に関しては、「国際文化論における二つの文化」『国際政治』第一一九号（二〇〇二年二月）。
- (3) 「朝永三十郎」『哲学事典』平凡社、一九七一年、一〇二九頁など。
- (4) 朝永およびその著作に関する一般的な記述として、「朝永三十郎」中村元・武田清子監修『近代日本哲学思想家辞典』東京書籍、一九八二年、「朝永三十郎」『明治文学全集八〇 明治哲学思想集』筑摩書房、朝永三十郎（<http://www1.ocn.ne.jp/~eosib/htmls/tom03.html>, 2007/09/18）、「朝永三十郎」子安宣邦監修『日本思想史辞典』ベリカン社、二〇〇一年、三井清「解説」『年譜』朝永三十郎「決定版 近世に於ける「我」の自覚史」角川文庫、一九五三年、朝永先生の思い出編集会「朝永三十郎先生の思い出」非売品、一九五七年。以下本論文で言及される朝永の伝記的記述はすべて、これらの文献に依拠している。
- (5) 朝永三十郎編『哲学綱要』寶文館、一九〇二年、および同編『哲学辞典』寶文館、一九〇五年。
- (6) 三木清、天野貞祐らの回想、前掲「思い出」。
- (7) この一〇年間における主な著作は、朝永『哲学と人生』隆文館、一九〇七年、および朝永『人格の哲学と超人格の哲学』弘道館、一九〇九年に収録されている。
- (8) 初期の著作として、朝永「自然科学の智識に基づける唯心論」『丁西倫理会倫理講演集』第二二号（一九〇三年四月、七一—一〇〇頁。方法的な著作として、朝永「哲学史攻究の旨趣と研究法」とに就て）『哲学雑誌』第二二〇号（一九〇三年一〇月）、二一—三〇頁など。この文章は、瀬沼茂樹編『明治哲学思想集（明治文学全集八〇）』（筑摩書房、一九七四年）にも収録されており、近代日本哲学史研究における初期の方法論的な議論として位置づけられている。
- (9) 丁西倫理会については、「丁西倫理会」鹿野政直、鶴見俊輔、中

山茂編『民間学事典 事項編』三省堂、一九九七年、四三—四五頁、および宮本又久「創立期の『丁西倫理会』の性格」『金沢大学教育学部紀要』第一九号（一九七〇年二月）参照。

- (10) 朝永「希臘人文の特性を論じて我邦人文の将来に及ぶ」『丁西倫理会倫理講演集』第三八号（一九〇五年一月、一—三四頁、朝永「希臘民族の哲学的素質」前掲『哲学と人生』、九六一—四八頁、朝永「ドンキホーテとハムレット（現代思潮に就て）」（全二編）『丁西倫理会倫理講演集』第四六号（一九〇六年七月）、五三—七三頁、第四七号、一三—四八頁。

(11) 朝永「凱旋門は一時的たる可し」『丁西倫理会倫理講演集』第四九号（一九〇六年一〇月）九三—九四頁、以下同様。

- (12) 朝永「人格哲学雑感」『東亜之光』第四卷第四号（一九〇九年四月）、一九—三二頁、以下同様。ほかに、朝永「個性主義に就て（全二編）」『丁西倫理会倫理講演集』第六八号（一九〇八年五月）、四—一五頁、第六九号（一九〇八年六月）、四九—六二頁、朝永「人格的唯心論に就て（全二編）」『丁西倫理会倫理講演集』第七五号（一九〇八年二月）、四五—八〇頁、第七六号（一九〇九年一月）、四六—六四頁。

(13) 朝永「西洋に於ける没我思想と自我思想との消長と民族の分布とを述べて我國の思想に及ぶ（全三編）」『丁西倫理会倫理講演集』第七九号（一九〇九年四月）、一—四一頁、第八一—八二号（一九〇九年六月）、三七—五八頁、第八二—八三号（一九〇九年七月）、一一—四五頁。以下は八二号掲載分より。

(14) 朝永「類化と応化」『人格の哲学と超人格の哲学』、三四七—三七三頁。

(15) 渋谷謙「温容珠の如き恩師」前掲「思い出」五八頁。

(16) 朝永「ポロニヤ哲学大会」『藝文』第二年第八号（一九一一年八月）、一五七—一六二頁、朝永「優種学万国大会に就て」『丁西倫理会倫理講演集』第一三〇号（一九二三年六月）、一—四三頁など。

- (17) 三井浩「恩師朝永先生」前掲「思い出」、六六頁。
- (18) 同上、八二頁。
- (19) 朝永「近世に於ける『我』の自覚史」『丁酉倫理会倫理講演集』第一三八号（一九一四年二月）、三八一―六九頁、第一三九号（一九一四年三月）、一―三五頁、第一四四号（一九一四年八月）、一―三一頁、第一四五号（一九一四年九月）、一―一四七頁。一九一四―一五年は、複数の論文を同時進行的に執筆しており、朝永がもつとも集中的に著述を発表した時期である。
- (20) 朝永「近世における『我』の自覚史」寶文館、一九一六年。
- (21) 「第十五、十六世紀に於ける欧州の思想上の革新は、其性質に於て吾明治維新の革新に酷似して居る。自己固有の文明とは非常に性質の違った文明を発見したこと、蛮野視して居つた其文明が重要な点に於て自己固有の文明よりも遙かに優秀で豊富なることを覺つたこと、自然科学上の世界観が全然改造されたこと、学問上道徳上に於て伝承若くば證據に拘束されて居つた個人的良心が解放されたこと等に於て両者は全然相一致する。」（前掲「『我』の自覚史」論文、第一三八号掲載分、四〇頁）
- (22) 朝永「獨逸思想と其背景」寶文館、一九一六年。
- (23) 朝永「思想上の國產奨励論に就て」『丁酉倫理会倫理講演集』第一四九号（一九一五年一月）、一―一三二頁、以下同様。
- (24) 朝永「獨逸思想と軍國主義」『丁酉倫理会倫理講演集』第一五〇号（一九一五年二月）、四〇―七五頁、以下同様。
- (25) 前掲「思想上の國產奨励論に就て」二七頁が初出であり、「獨逸思想と軍國主義」五一―五二頁でヘーゲル、ニーチェとの差異をもとにさらに論じている。
- (26) 朝永「拙著の批評に対して」『丁酉倫理会倫理講演集』第一七二号（一九一六年二月）、二七―四六頁、以下同様。
- (27) 朝永三十郎宛書簡二通（大正八年一〇月九、一〇日）『西田幾多郎全集第一八卷』岩波書店、一九五三年、二二七―二八頁（書簡番号 二五八）。
- (28) 朝永「カントの永遠的平和論の半面」『哲学研究』第六〇号（一九二一年）、一―二九頁。
- (29) 朝永「カントの平和観に就て——一月六日京都哲学会講演」『哲学研究』第七〇号（一九二二年）、三三―六六頁。
- (30) 朝永三十郎「カントの平和論」『改造』一九二二年三月号、一―四七頁。
- (31) 朝永三十郎「カントの平和論」改造社、一九二二年。
- (32) 遠山義孝訳「永遠平和のために」『カント全集一四 歴史哲学論集』岩波書店、二〇〇〇年所収（傍点、強調は原典通り）、二七―三頁。
- (33) 同上。
- (34) 朝永、前掲「カントの平和論」、二三頁。
- (35) 同上、二二―二四頁。
- (36) 同上、二四頁。
- (37) 同上。
- (38) 包括的な整理として、松山信一「朝永三十郎におけるカントの平和論」付 鹿子木員信と亀谷聖馨とにおけるカントの平和論』『松山信一著作集第七卷 大正哲学史研究』こぶし書房、一九九九年（初出一九六五年）、二六―一五九頁、片木清「永久平和論」よりみたわが国におけるカントの受容について』家永二郎、小牧治編『哲学と日本社会』弘文堂、一九七八年。
- (39) 桑木巖翼「カントの歴史哲学に就て」『哲学雑誌』第三四〇号（一九一六年六月）、桑木「カントと現代の哲学」岩波書店、一九一七年、米田庄太郎「カントの歴史哲学（四）」『哲学研究』第四〇号（一九一九年）、七八―一〇四頁、今中次廣「カントの契約的国際社会論」『外交時報』第四一九号（一九二二年四月）、今中「カントの政治思想」『同志社論叢』第八号（一九二三年六月）。
- (40) 鹿子木員信「永遠之戰」同文館、一九一五年、鹿子木「カント

- の「永遠の平和」を論ず」『哲学雑誌』第三五三、三五四号（一九一六年七月、八月）、亀谷聖馨「永遠の平和」弘道館、一九一八年。
- (41) 朝永三十郎『デカルト』岩波書店、一九三五年、朝永「西洋哲学史概説 近世前期」『岩波講座哲学第三卷』岩波書店、一九三三年、朝永『デカルト省察録』岩波書店、一九三六年など。
- (42) 朝永三十郎『哲学史の小品 ルソー・カント・ロッセ』黎明書房、一九四八年、朝永三十郎『ルネサンス及び先カントの哲学』岩波書店、一九四八年。
- (43) 朝永三十郎『近世に於ける「我」の自覚史』改訂版、宝文館、一九四八年。
- (44) 吉川弘之『テクノグロープ』工業調査会、一九九三年。
- (45) 南原繁「カントに於ける国際政治の理念」吉野作造編『政治学研究 小野塚教授在職廿五年記念』岩波書店、一九二七年、四九二―五六四頁、南原「カントにおける世界秩序の理念」『南原繁著作集』第一巻、岩波書店、一九七二年、二二―一九四頁（初出一九四二年）。両者は微妙に内容を異にしている。南原の議論に関しては、荻部直「平和への目覚め」『思想』二〇〇三年一月号、一五四―一七一頁、加藤節「南原繁」岩波書店、一九九七年。
- (46) 高坂正顕「カントの永久平和論」『展望』一九五一年一月号、三八―四三頁、高坂「政治・自由及び運命に関する考察」弘文堂、一九四七年、高坂「世界公民の立場」『高坂正顕著作集』第三巻、理想社、一九六五年、一八一―二二三頁（初出一九四九年）。
- (47) 代表的な仕事として、片木清「カント『永久平和論』の歴史的意義と方法論の問題」『国際学院埼玉大学研究紀要』第八号（一九八七年）(<http://www.kgei.ac.jp/ksjcs/s87k.htm> 2007/9/8)、宮田光雄「カントの平和論と現代」宮田光雄『平和の思想史的研究』創文社、一九七八年、一三七―一九九頁（初出一九七七年）、宇都宮芳明「永遠平和の構想」宇都宮芳明『カントと神』岩波書店、一九九八年（初出一九八七年、宇都宮芳明「カントの平和の哲学」『北海
- 道大学文学部紀要』第六二号（一九八七年）、五五―一〇八頁）、二二―二五八頁。
- (48) 特に注目するべき文献として、馬場伸也「ヘーゲルの国家・歴史観からカントの共同体論へ」日本平和学会編集委員会編『講座平和学Ⅱ 平和の思想』早稲田大学出版部、一九八四年、一三―一三六頁、最上敏樹「国連システムを超えて」岩波書店、一九九五年。
- (49) Eric S. Easley, *The War over Perpetual Peace: An Exploration into the History of a Foundational International Text*, Palgrave, 2004. 他に Mark F. Franke, *Global Limits: Immanuel Kant, International Relations, and Critique of World Politics*, State University of New York Press, 2001.
- (50) ベンジャミン・シュウォルツ、平野健一郎訳『中国の近代化と知識人 敵復と西洋』東京大学出版会、一九七八年。
- (51) Kenneth N. Waltz, *Man, the State, and War: a theoretical analysis*, Columbia University Press, 1959. なお「元になんて博士論文のタイトルは『Man, the State and the State System in Theories of The Causes of War (Submitted in partial fulfillment of the requirements for the degree of Doctor of Philosophy in the Faculty of Political Science of Columbia University, New York, 1954) である。

（しほろあ あし） 駒澤大学）

long as Callaghan's problem derived from the lack of support for the EMS within the Labour Party, it could be mitigated if the Conservatives backed him on the issue. Inside the Conservative opposition, there were actually numerous voices advocating a bipartisan approach to the EMS, including Geoffrey Howe and Nigel Lawson. In the end, the Conservative Party expressed a modest welcome for the EMS. But it was accompanied by a scathing attack on the government's policy, which put an end to any prospect that Britain might be able to enter the EMS on a bipartisan basis.

## International Thought of Tomonaga Sanjyuro: The Formation of "Self-State-International Relations" Paradigm in Modern Japan

SHIBASAKI Atsushi

This paper explores the life and thought of Tomonaga Sanjyuro (1871–1951) from historical and theoretical perspective, in order to find out formation of the epistemological base of understanding modern international relations in Japan. 'Epistemological base' is what all people in a certain time and place cannot help depend on or start from, when they try to conceive and explain the question, "What is International Relations?", regardless of their theoretical or methodological or political standpoint. In other word, this paper aims at founding the proto-paradigm of IR/International Thoughts, or the episteme that made modern IR/International Thoughts possible before such paradigm or school or discipline emerged.

First part of the paper deals with the importance of Tomonaga's Thought, which has been hidden by the presupposition of his historical role as merely an introducer or interpreter of history of modern Western Philosophy. Although his main academic work concentrating on introduction of Western philosophy, he wrote many articles about how Japan or Japanese should behave as a civilized nation, when trying to receive Western customs, cultures, and way of thinking. He developed his argument by citing and applying his knowledge of the history of Western philosophy, sometimes almost going beyond rigid academic restraint. Tomonaga was not an ivory-tower scholar. Actually he was in a sense a critic of Japanese civilization. His concern is always what is the best philosophical position or attitude Japanese nation should import and incorporate, by amalgamating these western philosophy and traditional way of thinking.

Second part analyzes his one of the two main works, *Kant No Heiwa Ron*

(Study of Kant's discourse on Peace) (1922). Tomonaga always faced with twofold project. One is how to make Japan/Japanese philosophically independent and stable, by make them understanding the history of Western philosophy from his lectures in Kyoto University and his first main book, *Kinsei Ni Okeru Ga No Jikaku Shi* (Awakening the consciousness of Self in the history of modern Western philosophy) (1916). The other is how to construct the world that Japan/Japanese was stably founded in modern world, as a subject who has the same entitlement as other western states or nations. *Kant No Heiwa Ron* has been understood as an interpretation of Kant's Perpetual Peace (1795). However this book made a vital role of explaining how self (man), state, and international relations tightly connected by cross-reference structure. His main contention was not how Kant thought peace, but how to use and interpret Kant's argument in his unique way in order to construct the modern world. This paper concludes the validity of his constitution of 'Self-State-International Relations' after his death in 1951 and to the present.

## Negotiated Settlement of Civil Wars: The Pitfall of Territorial Autonomy

SAHEKI Taro

Peace agreements do not necessarily end civil wars. Previous research shows that nearly half of the agreements reached between 1949 and 1992 failed to bring about peace. Why do some agreements produce peace while others fail to prevent violence from breaking out again? To answer this theoretical question, the present paper compares the peace process in Mozambique with the two peace processes in Angola. For all the common historical and regional contexts, the contrasting outcomes of these peace processes were striking. In Mozambique, the Rome Accords in 1992 succeeded in ending its civil war whereas in Angola neither the Bicesse Accords in 1991 nor the Lusaka Accords do so.

The comparison of these three peace processes reveals that the post-civil war institutions should be designed to mitigate the fear of the politically weak. Former military adversaries must agree to peacefully coexist with each other as political rivals. Therefore, some guarantee of the security and vital interests for the weak would be crucial to achieve peace. Exactly for this purpose, power-sharing agreements keep the politically strong from mo-